1982年1月22日

鎌田悪石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１９８２年１月２２日

【Ｎコード】
Ｎ０６４４Ｈ

【作者名】
鎌田悪石

【あらすじ】
ストライキを敢行したドライバー達。しかし、早くもハプニングが・・？

第2話：キャラミ・ストライキ珍道中

１５時３０分。ドライバー達は、今回のストライキの発起人、ニキ・ラウダの部屋に集まり、今後のストライキの予定について、ピローニから話を聞くことになっていた。

「えー、まず、メンバーの確認をしますが・・・テオ（ファビ）とマス爺さんがいませんね。」

「確かに、昼間から全く見かけねえな」

「まさか逃げ出して、サーキットにいるんじゃ・・・」

「最悪、ここを抜け出して、バーニーにチクリに行ったんじゃ・・」

「よし、今から「マス・ファビ捜索隊」を結成する。アンドレア（デ・チェザリス）と僕は、サーキット内を捜索する。リカルド（パトレーゼ）とネルソンのブラバムは、ホテル内だ。その間、ここにいるメンバーの指揮は、ニキにお願いする。」

「よし、わかった。後は、任せておけ。」

ピローニ達が捜索に行っている間、ラウダがドライバー達にストライキの予定を伝える。

「連中、俺らのストライキで慌てふためいてるだろう。動きがあるならば、今日中だ。」

「その間、外出とかはどうなるんだ？」

「外に出る場合は、外に一台小型車を停めてある。目印は、ハンドルについてるオーストリア国旗と、外からでも分かるように、ボンネットにラウダ航空のマークをつけた、黄色の車だ。それをみんなで使いまわすことにする。」

「では、捜索隊から連絡があれば、電話で知らせる。」

ピリリリリ・・・ピリリリリ・・・

早速、捜索隊から連絡が来た。

「はい、こちらＧＰＤＡ本部。」

「ああ、ニキか、アンドレアだけれども、サーキット内をくまなく探した結果、テオが見つかった。どうぞ。」

「了解。テオの連れ戻しはディディエ（ピローニ）に任せる。お前はブラバムの２人と合流し、ヨッヘン・マスの捜索に当たれ。どうぞ。」

プツン。ツー、ツー、ツー。

「みんな、聞いてくれ。今聞いた通り、テオが見つかった。テオが戻り次第、事情聴取を行う。」

それから程なくして、テオ・ファビが、ピローニと一緒に戻ってきた。

「まず聞こう。なぜ逃げ出した？」

「・・・それは・・・ここで走っておいたほうが、明日のグリッドになると思って・・・」

「ＦＩＡや、上層部の連中への密告行為は？」

「・・・してません」

「本当だな？よし、今回は大目に見る。ここにいておけ。」

そして、ラウダが皆にこう言った。

「ファビは見つかった。後はマス爺さんだ。これより、捜索隊の数を増やす。３人ではちょっと無理があるからな。」

「誰を行かせるんですか。」

「じゃ、デレック（ワーウィック。ファビの同僚）。今からアンドレアに合流しろ。彼には俺が伝えておく。ホテルの入り口で待っていろ。」

「オッケー。ホテルの入り口ですね。」

そういうと、ワーウィックは足早に部屋を立ち去り、下へ、下へと降りていった。

「しっかし、まだＦＩＡの連中は何も言って来ないのかねえ。」

「今日中だろう。それまでは待つしかない。」

しばらく、部屋の中に、しんとした静寂が漂っていた。

「暇・・・だねえ」

ふいに、誰かがこんなことを言い出した。

すると、ラウダがこんな提案をした。

「外にプールがあるから、どうだ、そこで水遊びでも」

「いいですね。行きましょう。」

「でも、捜索隊の４人は？」

「うーん。いったん戻らせるか、それとも捜索自体を打ち切るか」

こんな話をしていたとき、ラウダの携帯が鳴った。

ピリリリリ・・ピリリリリ・・

着信音に、皆の期待が高まる。

「はい、もしもし。」

「おお、ディディエか。ネルソンだ。聞いて驚くなよ？マス爺さんが自首してきた」

「自首！？」

「おう。事情を聞いて見れば、今回の脱走は自分が言い出したんだとよ。今日少しでも走っておけば、明日のグリッドが少しでもましになるかもしれないって。そいで、走ったはいいが、途中でサーキットが閉まっちゃったんだとさ」

「ＦＩＡへの密告行為については？」

「やってないって。そいじゃ、これからそっちに連れて帰るわ。」

「そうか。じゃ、大急ぎで来てくれ。これからプールに繰り出して、行水をしようとしていた所なんだ」

「ホント！？ラッキー！おい！みんな、プールだってよ！」

ピローニには、その瞬間、携帯の向こうから、オーッというような盛り上がった声が聞こえてきた。

ドライバーたちはしばらく、プールで遊んでいた。浮き輪に浮かんで遊んでいる者、はたまた飛び込み台の１番高いところから威勢良く飛びこむ者。

ドライバーによって、「楽しみ方」も様々だ。

そして、プールから部屋に戻ろうという時に、ピローニの携帯が鳴った。

「はい、もしもし。」

「ピローニさんですか？ＦＩＡの者ですが、協議の結果、ライセン

ス剥奪に関するレギュレーションを一切、撤廃することに決めました。」

「えっ！？本当ですか！？」

「ああ、本当だ。詳しいことについては後日、追って連絡する。」

「そうですか。では」

ピッ。

ピローニは携帯を切ると、開口一番に叫んだ。

「みんな、喜べ！レギュレーションが撤廃されたぞ！！」

「おー！！」

「やったぞー！」

「朝早くから、篭城したかいがあったなあ。」

ドライバー達が騒ぐ中、ラウダが進み出てこういった。

「みんな、よくやってくれた。諸君達のお陰で、ＦＩＡを動かすことができた。まったく素晴らしいストライキだった。それでは、我々の成功を祝して、乾杯！」

「かんぱーい！」

ドライバー達はしばし、勝利の余韻に浸る。

ともあれ、ストライキも終わった。しかし、キャラミの1日は、まだ長い。
果たしてこれからドライバー達に、どんなハプニングが待っているのだろうか・・・

《第2話　end》

《第2話：困難と歓喜の午後》

１５時３０分。ドライバー達は、今回のストライキの発起人、ニキ・ラウダの部屋に集まり、今後のストライキの予定について、ピローニから話を聞くことになっていた。

「えー、まず、メンバーの確認をしますが・・・テオ（ファビ）とマス爺さんがいませんね。」

「確かに、昼間から全く見かけねえな」

「まさか逃げ出して、サーキットにいるんじゃ・・・」

「最悪、ここを抜け出して、バーニーにチクリに行ったんじゃ・・」

「よし、今から「マス・ファビ捜索隊」を結成する。アンドレア（デ・チェザリス）と僕は、サーキット内を捜索する。リカルド（パトレーゼ）とネルソンのブラバムは、ホテル内だ。その間、ここにいるメンバーの指揮は、ニキにお願いする。」

「よし、わかった。後は、任せておけ。」

ピローニ達が捜索に行っている間、ラウダがドライバー達にストライキの予定を伝える。

「連中、俺らのストライキで慌てふためいてるだろう。動きがあるならば、今日中だ。」

「その間、外出とかはどうなるんだ？」

「外に出る場合は、外に一台小型車を停めてある。目印は、ハンドルについてるオーストリア国旗と、外からでも分かるように、ボンネットにラウダ航空のマークをつけた、黄色の車だ。それをみんなで使いまわすことにする。」

「では、捜索隊から連絡があれば、電話で知らせる。」

ピリリリリ・・・ピリリリリ・・・

早速、捜索隊から連絡が来た。

「はい、こちらＧＰＤＡ本部。」

「ああ、ニキか、アンドレアだけれども、サーキット内をくまなく探した結果、テオが見つかった。どうぞ。」

「了解。テオの連れ戻しはディディエ（ピローニ）に任せる。お前はブラバムの２人と合流し、ヨッヘン・マスの捜索に当たれ。どうぞ。」

プツン。ツー、ツー、ツー。

「みんな、聞いてくれ。今聞いた通り、テオが見つかった。テオが戻り次第、事情聴取を行う。」

それから程なくして、テオ・ファビが、ピローニと一緒に戻ってきた。

「まず聞こう。なぜ逃げ出した？」

「・・・それは・・・ここで走っておいたほうが、明日のグリッドになると思って・・・」

「ＦＩＡや、上層部の連中への密告行為は？」

「・・・してません」

「本当だな？よし、今回は大目に見る。ここにいておけ。」

そして、ラウダが皆にこう言った。

「ファビは見つかった。後はマス爺さんだ。これより、捜索隊の数を増やす。３人ではちょっと無理があるからな。」

「誰を行かせるんですか。」

「じゃ、デレック（ワーウィック。ファビの同僚）。今からアンドレアに合流しろ。彼には俺が伝えておく。ホテルの入り口で待っていろ。」

「オッケー。ホテルの入り口ですね。」

そういうと、ワーウィックは足早に部屋を立ち去り、下へ、下へと降りていった。

「しっかし、まだＦＩＡの連中は何も言って来ないのかねえ。」

「今日中だろう。それまでは待つしかない。」

しばらく、部屋の中に、しんとした静寂が漂っていた。

「暇・・・だねえ」

ふいに、誰かがこんなことを言い出した。

すると、ラウダがこんな提案をした。

「外にプールがあるから、どうだ、そこで水遊びでも」

「いいですね。行きましょう。」

「でも、捜索隊の４人は？」

「うーん。いったん戻らせるか、それとも捜索自体を打ち切るか」

こんな話をしていたとき、ラウダの携帯が鳴った。

ピリリリリ・・ピリリリリ・・

着信音に、皆の期待が高まる。

「はい、もしもし。」

「おお、ディディエか。ネルソンだ。聞いて驚くなよ？マス爺さんが自首してきた」

「自首！？」

「おう。事情を聞いて見れば、今回の脱走は自分が言い出したんだとよ。今日少しでも走っておけば、明日のグリッドが少しでもましになるかもしれないって。そいで、走ったはいいが、途中でサーキットが閉まっちゃったんだとさ」

「ＦＩＡへの密告行為については？」

「やってないって。そいじゃ、これからそっちに連れて帰るわ。」

「そうか。じゃ、大急ぎで来てくれ。これからプールに繰り出して、行水をしようとしていた所なんだ」

「ホント！？ラッキー！おい！みんな、プールだってよ！」

ピローニには、その瞬間、携帯の向こうから、オーッというような盛り上がった声が聞こえてきた。

ドライバーたちはしばらく、プールで遊んでいた。浮き輪に浮かんで遊んでいる者、はたまた飛び込み台の１番高いところから威勢良く飛びこむ者。

ドライバーによって、「楽しみ方」も様々だ。

そして、プールから部屋に戻ろうという時に、ピローニの携帯が鳴った。

「はい、もしもし。」

「ピローニさんですか？ＦＩＡの者ですが、協議の結果、ライセン

ス剥奪に関するレギュレーションを一切、撤廃することに決めました。」

「えっ！？本当ですか！？」

「ああ、本当だ。詳しいことについては後日、追って連絡する。」

「そうですか。では」

ピッ。

ピローニは携帯を切ると、開口一番に叫んだ。

「みんな、喜べ！レギュレーションが撤廃されたぞ！！」

「おー！！」

「やったぞー！」

「朝早くから、篭城したかいがあったなあ。」

ドライバー達が騒ぐ中、ラウダが進み出てこういった。

「みんな、よくやってくれた。諸君達のお陰で、ＦＩＡを動かすことができた。まったく素晴らしいストライキだった。それでは、我々の成功を祝して、乾杯！」

「かんぱーい！」

ドライバー達はしばし、勝利の余韻に浸る。

ともあれ、ストライキも終わった。しかし、キャラミの1日は、まだ長い。
果たしてこれからドライバー達に、どんなハプニングが待っているのだろうか・・・

《第2話　end》

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0644h/

1982年1月22日

2010年10月8日13時34分発行